

七小校長室便り

開校51年目

国立市立国立第七小学校

校長室便りNo.2 令和5年(2023年)5月9日

ゴールデンウィーク明けの全校朝会の様子から

ゴールデンウィークが終わり、5月8日の月曜日に全校朝会を行いました。体育館で行う全校朝会も今年度で3回目となりましたが、子供たちの順応力は流石で、以前からずっと行ってきたかのような様子で、司会進行の先生の話や6年生児童のことばなどに集中している姿がありました。中には、体の向きを話す人の方にしっかりと向けて、何の話をしているのかを聴こうという姿勢の子供もいました。

朝の挨拶も、適度な大きさの声で清々しく体育館に響き渡り、一日のスタートであり、一週間の始まりの朝会として、ようやく学校らしい取組が展開できるようになってきています。保護者の皆様や地域の皆様にご心配をおかけしてきておりました、感染症対策における5月8日の2類から5類への変更以降の具体的な取組の内容については、10日以降にすぐる等を使ってお知らせすることになりますので、もうしばらくお待ちください。

状況的には、感染症が完全に終わった訳ではないことは、皆様もご承知のところかと思いますが、多くの点において、コロナ禍以前の取組を行えるところまでになってきているところです。これからも、子供たちの「安全と安心を第一」に学校の様々な取組を展開していくことにおいては、何も変わるところではありません。これからの学校の取組においても様々にご理解とご協力をいただきながら、よりよい学校運営を行ってまいります。



矢川プラスでの子供の様子から

令和5年4月から開設されています、矢川駅近くにできました矢川プラスの職員の方から、本校の6年生の取組の様子について、ご連絡をいただきました。矢川プラスは、「まちなかのおおきな家と庭」をコンセプトに、子どもから高齢者まで、だれでも気軽にふらりと立ち寄れるような施設となっています。



お知らせいただいた内容としては、矢川プラスにおいて、カプラと呼ばれるジェンガのようなブロックを使い、3m程もある天井に届くような高く積み上げる取組を行ったとのことでした。カプラというブロックは、「ワンサイズの板」を積み重ねるだけで、建物や乗り物、動物まで作れるフランス生まれの木製ブロックです。また、積み上げるには、かなりの根気と集中力がいるもので、世界大会が行われるほどの知育玩具でもあります。

その取組に、本校の6年1組の3名が挑戦し、職員の皆さんも驚くほどの高さまで積み上げることができたということでした。本校の最高学年の子供の集中する様子や最後まで頑張る姿を矢川プラスの職員の皆さんに見ていただけたことは、とても嬉しいことです。できれば、実際に見てみたかったなと思わせるような子供たちの取組でした。今回は、3人ということでしたので、協力する心や力も身に付けてくれたのではないかと思います。遊びには、多くの学びがあります。学校だけでは身に付かない力を、たくさん遊ぶことを通してたくさん学び、人としてのより良い力を積み上げていってほしいと思う出来事でした。

情報をいただいた矢川プラスの方にも御礼を申し上げます。また、七小の6年生のよりよい姿を見せてくれた3人にも、最後まで協力し、集中して頑張ったことへの拍手を送りたいと思います。

みんなちがってみんないい

5月2日(火)朝の始業前の時間を使って、七小の特別支援学級「くるみ学級」と特別支援教室「はばたき」のことを、それぞれの担当の先生方にネット放送でお話をしてもらいました。私たちは、それぞれ得意なこともあれば、苦手なこともあります。みんなそれぞれにもっている力も違います。くるみ学級の子供たちも、はばたきで学ぶ子供たちも、毎日の生活を楽しく元気に過ごすために、集中することやお話を聞くこと、考えたことを話したりすること、人と楽しく関わって遊んだりすること、いろいろなことに挑戦する仕方や学び方の勉強をしたりしていること等々を伝えてもらいました。



学校は、みんながそれぞれに安心する居場所で安全に過ごすことができ、たくさんのお話を学ぶ

場所だということが分かってもらえたと思います。みんなのもつ力や考えは違います。だからこそ、楽しくなるし、たくさんの学びがあります。七小は、「みんなちがって、みんないい」学校だよということをみんなで確かめ合っていていこうとしているところです。

これからも一人一人を大切に、だれもが生活しやすい学校であり続けたいと思います。

3・4年生の遠足

5月1日(月)に、3・4年生(くるみ学級の子供たちを含めた)が昭和記念公園に遠足に行きました。天候も寒くもなく、暑くもなく、この時期としてはとても過ごしやすい日で、熱中症等も心配ありませんでした。



南武線を使っの校外へのお出かけは、これまでのコロナ禍の制限もあり、3・4年生としては、小学校生活における行事では、初めての経験となりました。周りの人を意識しながら、自分たちが守る必要のあるルールに従いながら、先生方の指示を聞いたり、しっかりと歩いたり目的地まで安全に行くことができました。また、公園の中では、4年生が3年生をリードする形の各グループで、決められた場所で楽しく遊ぶことができました。学校に戻ってきたときには、最後までよく頑張ったことが分かるほど、疲れたような姿がありました。

ただ、遊ぶだけでなく、集団で行動すること、周りを意識すること等、きっとたくさんの学びのあった一日だったことでしょう。楽しかったことは、間違いのないと思います。

【校長のつぶやき】

以前にも校長のつぶやきに載せたことがあると思いますが、私の故郷は、関西地方の和歌山県です。東京からは、高速道路で行っても6~7時間以上の行程となりますが、以前は、もっと時間がかかっていました。交通網が整備されるまでは、7~8時間かかり、渋滞に巻き込まれると12時間以上ということもありました。電車や飛行機を使って帰ることもできますが、家族で帰省ともなると交通費だけでもかなりのものとなり、帰省にかかる時間も、自動車と比べてもあまり早くはならないため、やはり自動車で帰省する以外に選択はできないという感じです。

また、私の実家があるところは、ほとんどの家が自動車を使わなければならない場所でもあり、買い物に行くのも、公共交通機関を使っていくことは難しい場所で、かなり不便なところです。最寄りのJRの路線には、十数年前までスイッチバック方式の駅があり、今では、通過駅となっていますが、1時間に1本程度の運行になってしまっています。本当に寂しい限りです。

それでも、いくつかの町が合併して市となり、それなりに大きくなっています。幹線道路沿いには、大きなレストランやファミレス、飲食店街もあり、賑わいを感じますが、夜の20時を過ぎると一気に交通量も減り、信号も早い時間から点滅へと変わります。

幹線道路から1本道入ると街路灯も少ないところも多く、本当に一人で歩くのが怖くなるほどです。今、自分が住んでいる東京の郊外にある、決して人通りが多い場所ではない自宅と比べても、明らかに不便で寂しい場所です。

でも、それでもやはり、自分の生まれた故郷は、いつ帰っても、どんな時でも、日々の生活の中で忘れていた「時間の大切さ」や忙しいという言葉に隠されている「心を亡くしているという状況」を、あつという間に気付かせてくれて、自分を取り戻させてくれる場所となります。それが、故郷という自分の原点ともいえる場所なのでしょう。

最近になって、両親のことで帰省をしなければならないことが多くなり、年に数回は帰省をしています。それだけに、自分の生まれた故郷という場所をとて意識するようになりました。また、自分の両親の家系を知る機会もあったこともあり、より一層、自分という人間の原点の場所を大切にしたいという気持ちも改めて生まれています。

人はそれぞれに、自分が大切にしている場所や出来事があります。そして、自分にとって、辛いことや嬉しいこと等をきっかけに、その場所や当時の出来事を思い返したり、その時に一緒にいた人のことや言葉を思い出したりしながら、もう一度、自分を見つめ返す時があります。原点の数は、人それぞれに違いますが、きっと原点をもっていない人はいないのではないかと思います。

こんな言葉があります。—「**人生の岐路に立った時、原点をもつ人は強い。**」—

私の人生の原点の言葉です。今の時代は、様々に難しい選択を迫られる時代です。教育者として、子供たちに様々な原点をもって人生を生きていけるように、そして、自分の選択に自信をもって生きていけるように、関わり続けていきたい

と思う七小3年目の5月です。

